

第43回 大江戸活粋パレード 2015年10月25日



何故だろうか、最近、よく日本橋界隈を散策しているが、散策しようと決めた日は決まって天気に恵まれている。10月25日に見に行った、「日本橋・京橋まつり 第43回大江戸活粋パレード」を見ている最中も、ずっと雲一つなく、非常に天気が良かった。カメラの露出補正も少し困った程である。そんな天気に恵まれた日に盛大に行われた、大江戸活粋パレードやお祭りの様子を少しずつ紹介していきたいと思う。

朝10時半頃降り立ったのは、「大江戸活粋パレード」の出発地点に近い東京メトロ銀座線、京橋駅。開始1時間程前ということもあり、人の数はそんなに多くなかったが、本番直前に最後の練習をしている声や楽器の音、やることはやり終え後は本番を待つだけ、というような表情で、周辺を歩いている衣装に身を包んだパレード参加者、パレードスタッフ等、「大江戸活粋パレード」に関わっている人々が目についた。私も、紫色のはつぴを着たスタッフの方にパンフレットを頂き、パレードが始まるまでの間、中央通り沿いを歩いてみた。

パレードは左写真、9月に改修が終わり、新装オープンした中央区の有形文化財、そして1885年(明治18年)、創業者磯野計による船舶への飲食料品や船具の納入・販売からその歴史が始まっている、明治屋京橋ビル周辺からスタートする。京橋・日本橋エリアは近年再開発が開始されており、今後もしばらく続いていくが、最新鋭の高層ビルだけではなく、この明治屋京橋ビルのような再開発のされ方も魅力的である。明治屋京橋ビルは東京大空襲に耐えたというから、歴史的にも貴重な存在であろう。

明治屋京橋ビルの右方向、日本橋方面に目をやると、なんと「警視庁騎馬隊」の車輛が停まっていた。しばらく待って見ていると、左写真のように立派な馬がゆったりと降りてきて、足取りしっかりと歩き始めた。普段馬刺しでしか見ることもできない馬が、こんな間近で見られ、そしてパレードに参加するのかなと思うと、心なしか期待が膨らんできた。

「大江戸活粋パレード」は、二部構成であり、11時半頃から14時頃まで続く。日本橋・京橋エリアの地元の学校・団



体・官公署の人々が行うパレードの「オープニングパレード」と、日本各地様々な所からやってきた人達による「諸国往来パレード」があり、総勢24団体・約2000人の規模でパレードが行われる。私自身は京橋から歩き、東京駅八重洲口に近い日本橋3丁目の交差点でパレードが始まるのを太陽の光を浴びながら待っていた。

1. オープニングパレード

さて、開始時間が過ぎると、遠くの方に「クイーンスターズ」と銘打たれた白バイ隊とともに、ある動物の歩く姿が見えてきた。そう、先ほど警視庁騎馬隊の車輛から降りてきた馬達である。



たてがみが優雅に整えられ、艶々した栗色の毛色の馬と、薄い黒色の毛にところどころ白い毛が淡く出ている馬、二匹とも迫力があり格好良い。110年以上の歴史を持つ警視庁騎馬隊のレベルの高さを感じたパレードの始まりだった。ちなみに警視庁騎馬隊のホームページに15匹の馬たちのプロフィールが名前入りで掲載されており、どの馬が本パレードに参加したのかチェックしようとしたのだが、悔しいことに私には判別することができなかった...



騎馬隊が過ぎ、私は日本橋高島屋の前へと移動した。そしてしばらくすると、次に「中央区日本橋中学校 吹奏楽部」の生徒たちが私は1982年リリースのBoys Town Gangで知った「君の瞳に恋してる」や、スキマスイッチの「全力少年」をマーチ風に演奏しながら歩いてきた。自分自身も15年程前おそらくこんな時期があったはずなのだが、小さな体で一生懸命演奏し小刻みに歩いて行進している姿は可愛らしかった。そんな中学生たちのすぐあとに続いていたのが、人力車パレード。中央区長・実行委員会

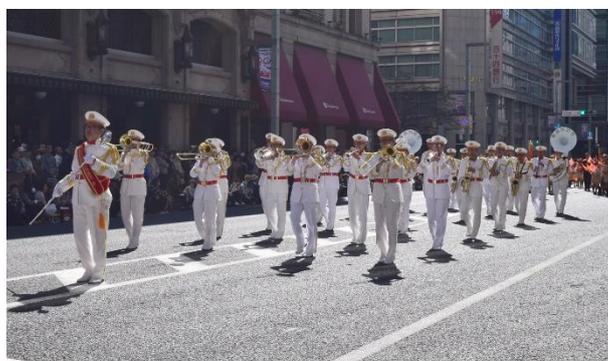
会長・副会長がミス中央の方々と人力車に乗って来ていた。



次にやってきたのは、学校法人開智学園の学校である日本橋女学館高等学校と開智日本橋学園(2015年度より、日本橋女学館高校は開智日本橋学園に名称変更をし、共学化している)の吹奏楽部の生徒達である。

しかし隅田川ほとりに位置する日本橋中学校、神田川ほとりに位置する開智日本橋学園という、都心という場所で育つ子どもたちは、どんなことを話し、考え、勉強しているのであろう。四国山地のそばの中学校・高校で教育を受けた私にとってはいま

いち想像がつきにくい。



次は大所帯で、東京消防庁のカラーガーズ隊・音楽隊の方々・そして東京消防少年団(日本橋・臨港・京橋地区)の子どもたちだ。上等そうな制服に身を包み中央通りをパレードする。ちなみに、私事ではあるが、10月10日―12日の三連休にかっぱ橋道具まつりに行った祭も、東京消防庁のパレードが歩行者天国となったかっぱ橋道具街でも行われていた。少し残念だったことは、かっぱ橋でのパレードでは東京消防庁のキャラクター「キュータ」の着ぐるみが一緒に歩いていたのだが、今回活粋パレードには「キュータ」が来ていなかったことだ。それがほんの少しだけ、心残りである。



そして、東京消防庁の次にやってきたのは、ピーポくんをはじめとする警視庁の方々。振り込め詐欺やテロ防止の幕を掲げて中央警察署の方々が行進したり、ピンクと灰色・紅白の制服を着た昭和48年から続く警視庁鼓隊の方々がマーチを奏でながら行進していた。また消防庁の行進と同様に、中央・久松・月島の交通少年団・青年団の子どもたちも、一生懸命ディズニーやアルプス一万尺、きらきら星といった曲を演奏しながら行進していった。月島交

通少年団の行進が、もんじゃに結びつけて大きく「事故をへらそう!!交通安全」と書かれた巨大なへらと一緒にやってきたのを見た時は、少しスリとしてしまった。これから日が暮れるのも早くなるので、私も交通安全には注意しよう。



そして、オープニングパレードの最後を飾るのは、レインボーブリッジを渡っている時に見える、上右写真奥のユニークなツインマンション THE TOKYO TOWERS が立地する勝どき・豊海エリアの豊海小学校・管楽器クラブの子どもたちの一団。一生懸命にトトロの「さんぽ」を演奏しながら私の前を通り過ぎて行った。

2. 諸国往来パレード

これら日本橋・京橋地区の地元団体、官公署団体のパレードが終了した正午ごろ、いよいよ、全国から集まった「諸国往来パレード」が始まった。



まずは一般社団法人「江戸消防記念会 第一区(中央区・千代田区の一部)」の皆さんだ。お正月、こたつで暖まりながら見るテレビのニュース番組で、消防の出初め式で梯子乗りが披露される姿をご覧になったことの方も多いただろう。この大江戸活粋パレードでも披露され、まさしく「火事と喧嘩は江戸の華」と言われる見物を、とても近い場所で私も見る事ができた。今回掲載した三つの技以外にもいくつか見る事ができたが、どれも習得するまで非常に難しくそうであり、また日常的に体を鍛えておかないとまず出来なそうな技ばかりであった。

梯子乗りの技の披露が終わり、拍手で見送られていくと、左写真のような纏が江戸消防記念会の締めとして行進していった。



次に登場してきたのは、阿波の武将、蜂須賀至鎮が 1586 年(天正 14 年)徳島城を築いて以降、徳島県で盛んに踊られ、現在では全国的にもかなり知名度の高い徳島県の阿波踊りだ。活粋パレードで阿波踊りを披露したのは、埼玉県草加市で活動しており、連員数 40 名、結成 10 年の「ほおずき連」の方々だ。毎年夏の神楽坂まつりや高円寺阿波踊りにも参加している。人数は他のグループと異なり少なめかもしれないが、老若男女入り混じり、少し緊張したような面持ちで、しかし太鼓の音と共に、楽しそうに踊っていた。



阿波踊りの次は、ぐっと離れて群馬県前橋市の左写真「NPO 法人前橋だんべえ踊り協会」のパレードだ。ソーラン節で有名な三橋美智也が歌った「前橋音頭」という曲を元に、平成 7 年に生まれたのがこの踊りだそうだ。私

阿波踊りの次は、ぐっと離れて群馬県前橋市の左写真「NPO 法人前橋だんべえ踊り協会」のパレードだ。ソーラン節で有名な三橋美智也が歌った「前橋音頭」という曲を元に、平成 7 年に生まれたのがこの踊りだそうだ。私

は知らなかったのだが、この踊りが披露される毎年10月の前橋まつりは、1万人もの集客を誇るという。このように大規模な踊りであるからか、活粋パレードへの参加人数も多くと、見ごたえがあった。そして、前橋市の市木・イチヨウをモチーフにしたという衣装と鳴子は色が鮮やかで青空に映えていた。



次にやってきたのは、杜の都、仙台から来た「仙臺すずめ踊り連盟」の皆さんだ。この「仙臺すずめ踊り」は、上の二枚の写真をご覧頂いてもわかる通り、各自ばらばらの振りで踊る時と、参加している青年・壮年全員で振りと扇子を揃える時とがあり、見ていて楽しくなるようなメリハリのある踊りであった。このメリハリのある踊りが雀の動きに似ているということと、伊達家の家紋が竹に雀だったということから、この名前が付けられた。このすずめ踊りも長い歴史があり、1603(慶長8年)年、仙台城の移転の儀式の宴席にて即興で踊られたものがはじまりだという。ただ、踊ったのが仙台藩出身の人たちではなく、泉州・堺から来ていた石工たちが踊り始めたというのが興味深い。前橋だんべえ踊りと同様、仙台で毎年伊達政宗の命日5月24日前後に行われる青葉まつりの中の一大イベントとなっており、毎年約4000人が踊りに参加している。



次は東京に戻り、中央区民謡連盟の方々が中央区の区章の入った紅白と群青の着物を着て、「これがお江戸の盆ダンス」を踊りながらやってきた。会員数は50名程で、ホームということもあったのか、堂々としてきれいに揃った踊りは見事であった。毎年8月中旬過ぎに浜町公園で開催される、「中央区大江戸まつり盆おどり大会」でも親しまれている曲・踊りだそうだ。このお祭りには踊りだけではなく、べつたら等の屋台も出ているそうで、来年は訪ねてみたいと思った。



中央区民謡連盟の方々が過ぎた後は、「かっぱれかっぱれ!」という掛け声と共に最後尾の方が見えない程の大行列でやってきた、同じく東京都の「櫻川流江戸芸かっぱれ」を踊る皆さんである。

「かっぱれ」は、大阪・住吉大社で2000年近くの歴史を持つとされている、「住吉踊」をルーツとする。

今回見た江戸の「かっぱれ」自体は、住吉大社の関係者たちが戦国時代後期から江戸時代にかけて、全国に「住吉踊」を広げていった結果、文化・文政年間(1804~1830年)に原型となるものが生まれたそうだ。諸説あり明確な由来はないのであるが、「かっぱれ」とは、天保年間(1830~1844年)に流行した「鳥羽節」の中の囃子詞、「わたしゃお前にかっ惚れた」というフレーズか

ら取られた等の由来があると言われている。その後、櫻川流の**かつぼれ**は現在、5代目まで歴史が**つづ**がれている。浅草神社では毎月奉納、両国の江戸東京博物館では隔月で披露されており、また桃川流の江戸**かつぼれ**は、べったら市の期間中、梶森神社で奉納されたりと、東京の伝統的芸能の一つになっていると言えるだろう。

次は東京から遠く離れて、沖縄のエイサーに空手の型を取り入れた振り付け・パチさばきで行進する「琉球國祭り太鼓 東京支部」の方々がやってきた。元となったエイサーは、500年程の歴史があり、沖縄全島エイサー祭は今年で60回を迎え、3日間の期間中30万人を動員する規模であるが、この「琉球國祭り太鼓」の団体は1982年に結成という、比較的歴史の浅い団体である。しかも創設の理由の一つが面白く、80年代当時といえば、暴走族全盛期であったが、その拡大を防ぐために創設された。その後、関係者の尽力で暴走族の若者だけでなく、たくさんの沖縄の人に広がり、今回踊っていた東京支部も1996年に結成されるなど、全国と海外含め約50支部、約2500人を有する程広まった。もちろん現在は暴走族関係の人々ではなく、若々しい、しかし写真の様なユニークなメイクをした親子サナジャー(エイサーの行列を整えたり、観客を盛り上げる案内役)もいたため、かっこよさと共に少し抜けた雰囲気も感じられた。またYAMAHAの重低音がよく効いた大型スピーカーからの音楽と、太鼓の重低音、そしてエイサーの指笛の音が合わり、さすが若者のみの団体がなせる演出だった。そして私も重低音が好きなので、つられて思わず体が動いてしまいそうだった。



南の踊りから次は再び東北へ。やってきたのは、岩手盛岡のさんさ踊りを披露した、東京でのさんさ踊りのグループ「大江戸さんさ」の方々である。1780年の文献には「さんさ踊り」の記述があったそうだが、いつ頃この踊りが誕生したのかは詳細不明である。しかし広く知ら

れているものとして、盛岡市の盛岡駅東、那須川町という所にある三ツ石神社の伝説があるという。その伝説というのは、羅刹鬼という鬼が現れ、いたずらばかりをしていたことから始まる。そのいたずらに困った人々は三ツ石神社の神様に退治をお願いした後、その願いが叶い、神様は鬼を捕らえたのであるが、ここからが面白い。三ツ石神社の名前の由来である神社境内の大きな3つの石(三ツ石)に、鬼の手形を押させ、悪さをしないように誓わせたのである。そう、岩に手形を押させたのである。岩手県の県名は、ここから来ているのと言われているのだ。そして、鬼の退散を喜んだ人々は、三ツ石の周りを「さんささんさ」と喜びながら踊ったのが「さんさ踊り」の始まり、だそうだ。岩手県の由来を持つ、昔から続く踊りが見られて、なんだか一つ得した気分となった。



東北の次は九州・鹿児島と、東京・渋谷の「渋谷・鹿児島おほら祭実行委員会」の「おほら節」と「渋谷音頭」だ。何故、鹿児島と渋谷なのか？私はそう感じ得なかったのだが、渋谷と鹿児島は何かと縁が深いようだ。時は鎌倉時代、源平合戦で功績を収めた現在の渋谷一帯を所領していた渋谷氏が、薩摩にも所領が与えられたため、薩摩に移住したのが始まりだ。渋谷家の分家東郷家から出た東郷平八郎が祀られた東郷神社、渋谷西郷馬車道通り、薩摩藩渋谷藩邸、西郷隆盛が渡った西郷橋、及び西郷邸(現西郷山公園)が渋谷にあるというように、1000年程の縁があるようだ。現代でも、渋谷区と鹿児島市が相互防災協定を結んでいることや、鹿児島の民謡である「おほら節」が渋谷区で祭になるほど大切にされているということからわかるように、今もなおその縁は続いている。

今の渋谷は若者の街というイメージがどうしても表に出てくるが、踊っているのは比較のお年を召した方が多かった。生憎私が見ていた所にパレードが来た時は、「渋谷音頭」を踊っており、「おほら節」見られなかった。しかし、「渋谷音頭」は別の意味で印象に残る、度肝を抜かれる踊りだった。何に度肝を抜かれたかという、著作権の関係で転載は控えたいと思うが、その歌詞である。気になる方は、渋谷区のホームページに歌詞が掲載されているので、ご覧になって頂きたい。



10番目のパレードは、会員数250名、創立83年の「板橋区 山形県人会」の皆さんが踊る山形県の「花笠まつり」だ。花笠まつりは、先ほどの岩手県の「さんさ踊り」とともに東北六大祭りとして抜群の知名度を誇っている。明治・大正期の山形県中央部、村山地方で歌われていた工事の際の調子合わせの時に歌われていた作業歌から発展していった花笠音頭が、今では東北六大祭り、そして3日間の期間中100万人以上の動員を行う程になっている。今回のパレードでは、将来の花笠まつりを担うかもしれない小さな子どもも参加しており、この踊りの支持の幅広さに驚き、そして微笑ましく感じた。

次は北陸・富山県西部の現^{とよみ}砺波市発祥の、南京玉すだれを披露した「日本南京玉すだれ協会」の皆さん。玉すだれとは、数枚の竹板を組み合わせ、伸び縮みするものである。この玉すだれを使って、一体どんなことをするのであろうか…。百聞は一見に如かずなので、まず写真をご覧頂きたい。



これら左の4枚の写真が、玉すだれを使った伝統芸能である。「あ、さて、さて、さてさてさて、さては南京玉すだれ、ちよいとひねれば、ちよいとひねれば」という軽妙な掛け声とともに玉すだれの形を変え、繰り広げられる妙技だ。今回東京風にも歌詞を変えており、左上からレインボーブリッジ、右上が東京の花火。そして左下が宝船、右下が魚、という様に、伝統的な技を次は表現していた。変える早さも一瞬で、しかも人数が60名程と多く、色んな方向を向いて披露してもらうことが可能であったため、私も良い角度で技を楽しむことができた。伝統芸能というより大道芸として行われていた側面もこの南京玉すだれにはあり、私も思わず終わると拍手をして

しまう程面白い技であった。参加者の皆さんも、一人一人が楽しそうに技をしていらっした。



次は高知県のよさこいをベースに、2001年から毎年8月末に催されている

る明治神宮奉納祭に奉納するスーパーよさこいを踊る団体、2000年設立の「TANASHIソーラン会」と2004年設立「東京メトロシーブルー」がやってきた。なんとも豪華に、ボーカリストが2人乗ったトラックが先頭を飾り、そして後部では東京メトロの巨大な社旗を掲げながら繰り広げられるスーパーよさこいは、迫力があり圧巻の一言に尽きる踊りだった。最後、東京メトロの人達が「これからも東京メトロをよろしくお願いします！」とちょっとした宣伝をしていたのにはコヤリとしてしまった。



そして最後、13番目にやってきたのは、「東京で能登の祭りをやる会」と「石川県人会」の皆さんによる「能登キリコ祭り」である。今年は、何かと石川県が注目された年だったのではないだろうか。北陸新幹線の長野—金沢間の開業や、NHK連続テレビ小説「まれ」等、石川県についての話題が自身の周りでも多かった。そんな石川県のパレードでまずやってきたのは、北陸新幹線のPRの横断幕を持った方々と、着物等和装に身を包んだ皆さん。石川県のゆるキャラ、「ひやくまんさん」も一緒だ。この目が可愛い「ひやくまんさん」は、「加賀八幡起上り」という人形の玩具をモチーフに作られた。金沢箔や輪島塗等で細工し、石川県の魅力と工芸をギュッと詰め込んだアピールをしている。



そしてこの「ひやくまんさん」の次には、石川県能登の祭礼道具であり、パレード名にもなっている、3台の切子灯籠・略して「キリコ」がやってきた。写真からもわかる通り、4~5mはあろうか、背高の、神輿や太鼓台とはまた異

なった迫力のある姿をしている。担ぎ手の皆さんも楽しそうな顔で、堂々と、この大江戸活粋パレードを締めくくっていった。

これらの様々な文化や趣向を凝らしたたくさんのパレードを見終えると、日本橋南詰にて同時開催されていた、「諸国往来市」も覗いてきた。東北各県、長野県、滋賀県、奄美、と北から南、日本中の自治体からの出店がたくさんあり、目だけではなく口でも日本を楽しめる内容となっていた。

今回の第43回大江戸活粋パレードでは、参加中ずっと青空が広がり、暖かい中パレードやお店を楽しむことができた。また、何と言っても、五街道の中心である日本橋で、毎年開催されるにしても、全国の様々な祭や催しを一挙に見ることができたのは非常に貴重な体験だったと感じている。また、今回見ることでできた祭が行われている地方はもちろん、そうでない、まだまだ面白い祭がある地方にも出掛け、色々な文化や歴史を身に感じたいと思える、そんな素敵な時間であった。



進藤竜一